

江戸版本の挿絵にみられる文様の検討

○小沢直子 河村まち子 伊藤紀之

(共立女子大)

<目的>

江戸期には挿絵入り読物である浮世草子や絵本が数多く刊行されている。本研究では、井原西鶴や菱川師宣によって手がけられた版本を題材にし、挿絵に描かれた人物の小袖の文様について検討する。

<方法>

原作・作画ともに西鶴の作になる「好色一代男」大坂版と、師宣が挿絵を描いた「好色一代男」江戸版並びに絵本版の挿絵を比較検討する。また、「新板当風御ひいなかた」「新板..小袖御ひいなかた」などの雛形本との関連性を考察する。

<結論>

調査対象の絵本に描かれた登場人物の着物の文様と雛形本には多くの共通点がみられた。また、挿絵の登場人物に様々な着物を描こうとする作画意図も確認できた。この結果から、挿絵は単に物語の情景を伝えるだけではなく、読者に対してその時期の最新ファッションを楽しませる役割をも備えていたのではないかと考えられる。物語を読みたいという欲求と最新のファッションを知りたいという欲求をともに満たすことにより、読者の購買意欲をそそったのではないか。読者にとって、より魅力的な出版物とするために、あえて挿絵にファッション性をもたせたのではないかと考える。